令和４年度 周南市立勝間小学校 研修概要

研究主題

人としてよりよく生きようとする「かつま」っ子の育成 ～ 納得や発見で変容を促す道徳科の授業と「かつま」っ子カードの活用 ～

Ⅰ 令和４年度 校内研修について

１ 研究主題設定の理由

本校の児童は元気で明るく自分の思いや考えを素直に表現することができる児童が多い。しかし、その反面、自分の考えをもち主体的に行動することやルールやきまりを徹底して守ること、友だちの権利を大切にするという人権の尊重など道徳的な側面から振り返ったとき、このことが原因でトラブルが起こる現実は、本校においても課題であると捉えている。

そこで、昨年度から、研究主題を『人としてよりよく生きようとする「かつま」っ子の育成』とし、本校児童の課題を根本から改善していくことを目指して、道徳教育を中心に研究を進めてきた。昨年度の成果と課題を生かし、人としてよりよく生きようとする「かつま」っ子を育むため、本年度も引き続き本研究主題をもとに研究を深めていきたい。

２ 研究主題のとらえ方

（１）研究主題について

『人としてよりよく生きようとする「かつま」っ子』とは、自分にとって、そして他者にとってよりよい行為はどのような行為なのかを主体的に選択し、進んで実践しようとする意欲をもった児童である。本校の児童は道徳科の授業の中で「〇〇することって大事だな」「〇〇するっていいな」という考えをもつなど道徳的判断力や心情は養われても、実生活の道徳的場面になると躊躇して行動に移すことができない児童が多い。そこで、道徳的な行為を主体的に行おうとするような道徳的実践意欲と態度をもった児童を育むためには、道徳科で育んだ道徳的判断力や心情を自分自身の生活体験と結びつけながら体感していくことが大切であると考えた。道徳科と学校生活とのつながりを明らかにしながら体験を積み重ねていくことで、人としてよりよく生きようとする態度を育んでいき、生涯にわたって自分の生き方や他者との関わり方、よりよい社会の在り方を考える人材の育成を目指して、本研究主題を設定した。

（２）研究副主題について

人としてよりよく生きようとする「かつま」っ子を育むための具体的な方策として、『納得と発見で変容を促す道徳科の授業と「かつま」っ子カードの工夫』を副主題とし、研究を進めることとした。まず、授業研究として、昨年度の研究では「自己の変容を実感できる道徳科の授業」を副主題とし、授業の中で児童に感動を生ませ、その感動を原動力とし、実生活に学びを生かしていこうとする意欲を生ませることをねらいとして授業研究を進めた。昨年度の授業研究の中で児童の心が動いた場面はどこであったかを分析していくと、友だちの意見に触れ、自分の考えと比べながら納得したり、話合いの中で新たな考えを発見したりしたときなどであった。納得と発見が変容を促すキーワードであるととらえ、本年度は副主題を「納得と発見で変容を促す道徳科の授業」と設定した。納得と発見が児童の心を動かし、よりよく生きようとする実践意欲へと繋がることを期待する。

次に、「『かつま』っ子カードの活用」とは、昨年度の研究で生まれた「かつま」っ子カードを活用して、道徳科で深めた道徳的価値と教育活動全体とを繋げ、実践を通して更なる道徳的価値の深まりをねらう取組である。「かつま」っ子カードとは、本校の理想とする三つの児童像に合わせて道徳の三本柱を設定し、それに関わる重点内容項目を定め、さらにその重点内容項目の別葉に記載している学習や学校行事から、目標達成のために力を入れて取り組みたいものを選りすぐって記載していったものである。今年度は昨年度の研究の反省を生かし、更に効果的な取組になるよう工夫・改善しながら取り組みたい。児童は「かつま」っ子カードの活用を通して、道徳科で深めた道徳的価値を学校生活の様々な場面で体感しながら、道徳的価値の意義や大切さについて実感を伴った理解をしていくことを期待する。

（３）研究の視点について

今年度は昨年度の成果と課題を生かすため、全校統一の研究の視点を設定し研究を進めていくこととする。

視点１　**自分事として捉える導入の工夫**

道徳科の授業で学んだことを「実生活に生かしていきたい。」という実践意欲へとつなげていくためには、本時の学びを自分事としてとらえさせることが不可欠であると考える。そのためには、導入で本時の学びと児童の現状の価値観や生活体験などを結び付ける活動が必要となる。

視点２　**価値に迫る発問と見える化による話合いの活性化**

多くの発見や納得を生むためには、自分の考えと他者の考え比較する活動が不可欠である。価値に迫る発問に対する考えを見える化することで、自分と他者の共通点や相違点を発見しやすくなったり、児童自身が主体的によりよい納得解を導き出したりすることにつながることを期待する。

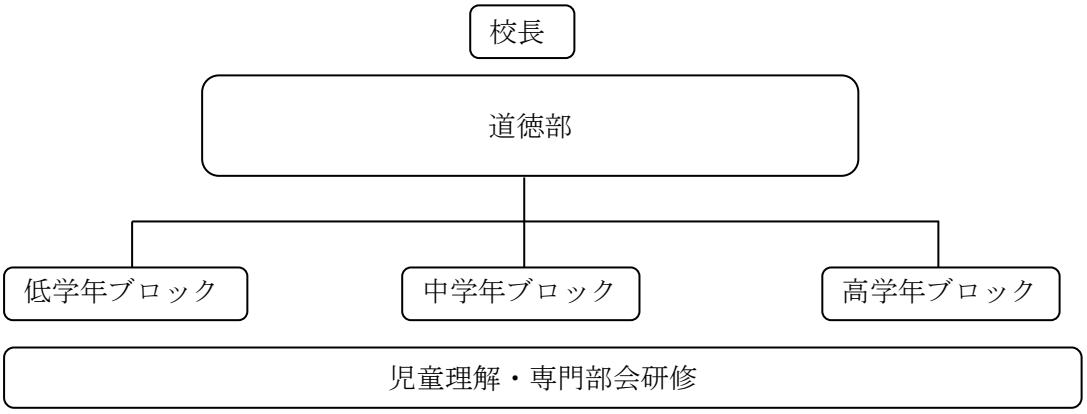
視点３　**変容の自覚と自分の生き方につなげる終末の工夫**

導入時でもっていた自身の価値観と授業後の価値観を比較し、自身の価値観が変化したり、より深まったりしたことを確認することで、これからの実生活に本時の学びを生かしていこうとする高めていくことができると考える。そして具体的にこれから学びをどのように生かしていけそうかを想像させるような終末の工夫を行うことでよりよく生きようとする意識の芽生えを期待する。

３　研究の進め方

・研究組織について・・・低・中・高ブロックによる
・指導案検討会・・・プロット案検討会→授業検討会の流れで行う
・授業研究会・・・ワークショップ型

〇研究組織



〇授業研究会

・一人一授業を公開する。そのうち全体研修を３回行う。他はブロック研修として行う。ブロック研修には、参観シートを利用する。
　※昨年度同様、同学年で資料（かつまっ子カードにある資料）を一つ決め、2 人で協働し、一つの指導案を作成する。
・全体研修には講師を招聘する。ブロック研修についても希望に応じて可能であれば講師を招聘する。
　※Ｒ３年度・Ｒ４年度は市が委任する研究サポート委員による指導・支援を受ける。
・全体研修の指導案は総案とする。他は本時案のみとし、全員に配付する。
・教科・領域については、道徳科とする。
・同学年研修後の協議会については、参観シートなどをもとに、授業参観者で行う。

4　研修計画

学期	月	日	内　容
Ⅰ	4	15	校内研修①　本年度の校内研修の方向性（研修計画、研究主題・副主題） 道徳授業セミナー授業者の検討 プレ授業月の検討
		27	校内研修②　本年度の校内研修の方向付け（研究の視点） 資料検討→決定 指導案形式について 一人一授業の授業日検討
	5	18	校内研修③　道徳授業研究会　各ブロックでプロット案づくり①
	6	22	校内研修④　第０回校内研究授業（今年度の方向性を示す授業） 第６学年１組　山本　誠一郎　教諭　道徳科「ピアノの音が……」
	7	12	一人一授業　第６学年２組　中谷　裕衣子　教諭　道徳科「ピアノの音が……」
夏季休業		22	校内研修⑤　（午前）　各ブロックでプロット案づくり②
		27	校内研修⑥　（午前）プロット案検討
	8	24	校内研修⑦　指導案検討会　各ブロック
Ⅱ	9	15	一人一授業　第１学年１組　宮本　真弓　教諭　道徳科「ぼくのはなさいたけど」
		27	校内研修⑧　第１回校内研究授業　第５学年３組　髙橋　明生　教諭 道徳科　「かれてしまったヒマワリ」 （指導者：光市立光井小学校　校長　温品　賢二　様）
	10	4	一人一授業　第４学年１組　田中　裕子　教諭　道徳科「全校遠足とカワセミ」
		12	一人一授業　第１学年２組　小野　由佳　教諭　道徳科「ぼくのはなさいたけど」
		20	一人一授業　第３学年２組　小松　俊介　教諭　道徳科「きまりじゃないか」
		25	一人一授業　第３学年１組　宇都宮　恵　教諭　道徳科「きまりじゃないか」
		19	校内研修⑨　第２回校内研究授業　第４学年１組　吉中　愛　教諭 道徳科　「日曜日のバーベキュー」 （指導者：山口大学教育学部　准教授　大丸　奈緒美　様）
	11	1	一人一授業　第２学年２組　北本　侑夏　教諭　道徳科「かくしたボール」
		4	一人一授業　第５学年１組　山平　真弓　教諭　道徳科「駅前広場はだれのもの」
		8	一人一授業　第５学年３組　有光　昌子　教諭　道徳科「駅前広場はだれのもの」
		2	校内研修⑩　第３回校内研究授業　第２学年２組　平尾　さおり　教諭 道徳科　「きいろいベンチ」 （指導者：やまぐち総合教育支援センター　研究指導主事　藤永　啓吾　様）
		16	校内研修⑪　研究・実践プレ発表 発表者：研修主任　山本　誠一郎
		25	道徳授業づくりセミナー 【研究・実践発表】　発表者：研修主任　山本　誠一郎 【低学年ブロック】 授業者：第２学年１組　平尾　さおり　教諭　道徳科　「きいろいベンチ」 指導者：やまぐち総合教育支援センター　研究指導主事　藤永　啓吾　様 【中学年ブロック】 授業者：第４学年２組　吉中　愛　教諭　道徳科　「日曜日のバーベキュー」 指導者：山口大学教育学部　准教授　大丸　奈緒美　様 【高学年ブロック】 授業者：第５学年２組　髙橋　明生　教諭　道徳科　「かれてしまったヒマワリ」 指導者：光市立光井小学校　校長　温品　賢二　様
	12	7	研究紀要について（終礼で）
Ⅲ	1	18	校内研修⑫　本年度の研修の反省
	2	22	校内研修⑬　本年度の研修のまとめと来年度に向けて

Ⅱ　研究の成果と課題

今年度は「やまぐちっ子の心を育む道徳教育」プロジェクト推進校２年次として、道徳授業セミナーでの研究発表に向けて研究を深めた。研究主題は、昨年度に引き続き『人としてよりよく生きようとする「かつま」っ子の育成』と設定し、昨年度の成果と課題を生かしながら、本校児童の課題解決に向けたよりよい道徳教育の在り方を模索した１年となった。また、副主題を『納得や発見で変容を促す道徳科の授業と「かつま」っ子カードの活用』と変更し、児童に道徳科の授業での学びを「これからの生き方に生かしていきたい。」という思いを抱かせることを目指して、キーワードを「納得」と「発見」に絞り、３つの視点を設定して授業研究を進めた。さらに、「かつま」っ子カードの取組も昨年度の反省を生かしながら改良を重ね、年間を通して取り組んだ。全３回の全体授業と一授業、「かつま」っ子カードの取り組みを通して見えてきた成果と課題は次のようなものがあげられる。

１　成果【３つの視点による授業の工夫】

（１） 自分事として捉える導入の工夫

道徳科の授業を通して児童に「道徳科での学びを実生活に生かしていきたい。」という道徳的実践意欲を高めていくためには、本時の学びをいかにして自分の事として捉えさせることができるかが重要である。そのためには、授業の導入時に児童に「問い」をもたせる活動を設定することが必要であることが分かった。有効であった実践については以下のとおりである。

・現状での価値の捉えの共有

例えば、『「親切」とはどういうことか？』というような本時で取り扱う価値に対する漠然としたイメージを問い、現状での捉えをクラスで共有し、個々の捉えの違いや共通する考えを確認することで、クラス全員が同じ土俵に立って授業をスタートすることができた。共有する過程で「親切とは大切なこと」という多数派の共通する考えを取り上げることで、次の発問へとつながるきっかけにもなった。

・理想と現実から矛盾に「問い」を生む発問の工夫

『「きまり」は大切ですか？』という発問に対して多くの児童は迷わず大切であると答えた。しかし、『どんな時でも「きまり」は守れていますか？』と問うと躊躇して手を挙げることができない児童が出た。このように理想として「きまり」を守ることは大切なことで、必ず守らなければならないとわかってはいるが、自分の生活経験を想起すると、守ることができていないこともあるという現実がある。導入時にこのような発問を行い、人の心の弱さに気付かせることで、「なぜ守れないときもあるのだろう？」という問いを生ませることができる。これを、資料の主人公の心の迷いとつなげることで、より自分の事として考えることができた。そして授業を通してこの問いに対する答えを探していくことで、終末時に自分事として今後の生き方を考えるきっかけとなった。

・価値にかかわる日常場面の提示

以上のような矛盾に気付かせる手立てとして、日常場面の提示も有効な手立てとなった。『「きまり」は大切ですか？』と問うた後に、実際に日常から使っている学校のトイレのスリッパが乱雑に置かれている様子の写真を提示し、『本当に「きまり」を大切にできていますか？』と問うことで、より現実の難しさを実感させることができた。また、このような価値にかかわる日常場面の様子を効果的に提示し、授業が終わるまで板書に残しておくことで、授業を通して、理想の語り合いに終始することなく、より現実の事として意識しながら授業を展開することができた。

・Google formsによるアンケートの活用

以上のような発問を導入時に行うための有効なツールとしてGoogle　formsの活用が挙げられた。有効な点としての１点目は、時間の短縮につながることである。Google forms は授業前に事前アンケートという形で児童に答えてもらっておくことができる。教師によるアンケート作成も容易で、タブレットを活用すれば児童が質問に答える作業も非常に早く、簡単にできる。昨年度の反省として、「授業に手法を盛り込みすぎたせいで時間が足りなくなっていしまった。」という意見が多く挙げられた。このGoogle formsの活用はその課題解決の一助になる有効なツールとなった。２点目は、児童に興味・関心をもつきっかけを与えることができることである。Google　forms でとったアンケートの結果は自動的に数値化され、グラフの形で児童に提示することができる。導入時にこのグラフを提示することで、友達との意識の共通点や差異点を視覚的に確認することがき、児童に本時の価値に興味を沸

かせるきっかけとなった。

（２）価値に迫る発問と見える化による話合いの活性化

導入時にもった「問い」に対する自分なりの答えを導き出すため、自ら模索したり友達と共同しながら納得解を探ったりする際の解決の一助となることを期待して「思考の見える化」を行うこととした。また、価値に迫る発問と組み合わせて思考の見える化を行うことで、本時で取り扱う価値の本質に迫るような学びになることを目指して実践を行った。有効であった実践については以下のとおりである。

・「役割演技」による思考の見える化

低学年を中心に役割演技を活用した実践を積み重ねた。「主人公はなぜそのような行動をとったのか？」など主人公がとった行動の理由を探る際に有効な手立てとなった。役割演技は登場人物の行動を再現し、行動の根拠を問うことで、行動の裏に隠された思いを表出させることができることが分かった。また、即興で演技を行うので、とっさに演じた行動から児童の本音を聞き出すことにもつながった。

・「心のシーソー（天秤）」による思考の見える化

中学年を中心に心のシーソー（天秤）を活用した実践を積み重ねた。心のシーソー（天秤）とは、例えば主人公が委員会の仕事をさぼってしまったという場面で、「仕事をしなくてはならない。」と「遊びたい。」の２つの思考で揺れ動く心の迷いをシーソー（天秤）が重さに応じて上下する様子に模して提示するものである。場面ごとに移り変わる主人公の複雑な心情をとらえる際に有効な手立てとなった。また、傾いた要因を問うことで主人公の選択の裏に隠された心情を想像することにつなげることができた。心のシーソーを活用することで、人間は白黒はっきりつけることは難しく、誰しも心に弱い部分をもちながらも他者のためや自分の未来のために弱い心を押し殺しながら日々、行動を選択しているという、正しい判断の難しさに気付くきっかけにもなった。

・「あた Map」による思考の見える化

高学年を中心にあた Map を活用した実践を積み重ねた。「あた Map」とは、登場人物の心情を頭のイラストの中に書き入れていくものである。書き入れる際には、考えていることを記述したら丸で囲むという記入法をとることで、１つ記入した後、頭のイラストの空白の部分に、２つ目、３つ目と記入する児童の姿が見られた。人が行動する際には、必ずしも１つの思考で動いているのではなく、様々なことを同時に複雑に考えながら行動を選択していることに気付くきっかけとなった。また、丸の大きさを主人公の考えの強弱で書き分けることで、主人公が何を一番大切にしているかを焦点化させることができた。「あた Map」は人の複雑な心情を整理するための有効なツールになったと感じる。さらに、この「あた Map」を場面ごとに作成し、比較することで、考えが消えたもの、強くなったもの、弱くなったもの、新たに加わったものと登場人物の思考の変化が分かりやすく、心の変容に気付くきっかけにもなった。

（３） 変容の自覚と自分の生き方につなげる終末の工夫

導入時に自らがもった「問い」に対する答えを他者との対話などで見出した後、学びを「これからの生活に生かしていきたい。」と児童に思わせるには、終末の工夫が欠かせないと考えた。そこで、終末では、本時で得た学びを自分の生き方にどのように生かしていけそうかについて具体的に想像させることが必要である。児童は実際の日常生活の一場面を想像しながら、その時の行動に本時の学びを生かすとすればどのような行動をとるべきなのか考えるだろう。また、終末時に導入時でもった問いに立ち返らせることで、自身の変容に気付き、自身の成長を感じることで、これからの実践意欲を高める手立てとなると考えた。道徳科の学びが机上の空論に終わらず、生きて働く道徳科になるよう期待して実践を行った。有効であった実践は以下のとおりである。

・導入とつなげる工夫

導入時に問いをもたすために活用したイラストや日常生活の問題場面の写真を終末時に再度提示することで、本時で得た学びを活用して現状の問題をどのように解決していくことができるのかを考えさせた。本時の学びから、実際の生活に生かすことができる具体的な解決方法を得た児童の振り返りから、実践意欲の高まりを感じることができた。

・「これから」の視点で考える振り返り活動

「これから」の書き出しを指定して振り返りを書かせたり、「これから守っていきたいきま

りとは？」＋「なぜそのきまりを守らないといけないのか？」など本時の学びを実生活につなげ、意義を問うたりすることで、具体的な生かし方を想像させることができた。高学年では、「きまりや約束が守られる社会にするために、これからどのようなことを心がけたいか？」という振り返りの視点を与えることで、自分自身の事だけでなく、社会とのかかわりにも目を向けさせることができた。

・未来への自分へメッセージを書く振り返り活動

これから、本時の登場人物のように「心の弱さが出てしまったときの自分へどのような言葉をかけたいか？」という視点で振り返りを書かせることで、これから、本時の登場人物と同じような葛藤場面に出くわした際、弱い心に勝ち、心を奮い立たせて正しい選択ができるような方法を具体的に考えることができた。

２　課題

（１） 話合いの活性化のための思考の見える化

今年度の視点の１つであった思考の見える化には、児童の多様な考えを引き出したり、登場人物の複雑な心情をとらえやすくしたり、人の心の弱さに気付きやすくしたりするなど多くの成果が挙げられた。しかし、ねらいとしていた話合いの活性化に十分に活用できたかと問われると疑問が残る結果となった。今年度の多くの実践で見える化が様々な考えに気付き、多くの意見に触れるきっかけにはなってはいたが、その後の話合いでは、教師対児童のやり取りの中で集約していく実践が多かった。これからは、見える化を教師が話合いに活用するツールとして捉えるのではなく、児童が話合いに活用するツールとして捉えるという視点の切り替えが必要であると感じた。来年度の研究では、児童同士で思考の見える化を活用しながら話し合い、議論を通して価値の深まりに気付いていくような思考の見える化を活用した話合いの在り方を模索していきたい。

（２） 深める発問（場面）

「思考の見える化によって多様な意見を表出させることができたが、その多様な意見をどのように活用して深い学びへと導いていけばよいのか？」という課題が挙がった。多くの実践を通して、「中心発問後の深める発問」や「話合いの場面後の深める場面」など深まりを与える発問や場面の意図的な設定の必要性に気付くことができた。児童の自己の生き方を考えるきっかけになるような心を動かす価値の深まりを目指して、深める発問や場面の研究を行っていきたい。

（３） 時間配分の吟味

昨年度の課題にもあった時間配分が今年度の課題としても挙げられた。多くの手法を盛り込むことで時間が足りず、十分な振り返りの時間を確保することができなかった。一方で、今年度は昨年度の反省を生して、時間配分を意識して取り組んだ実践も行われた。しかし、課題として、意識しすぎて深める場面の時間を十分に取らずに進めたり、グループでの話合いを割愛してしまったりしたため、浅い考えに留まってしまったという反省も挙げられた。ねらいを達成するためにはどんな活動にどのぐらいの時間の確保が必要かはこれからの授業経験の中で教師が感覚的につかみ、必要十分な時間の確保ができるようにさらに活動を精選、吟味する必要性を感じた。

３　来年度に向けて

今年度は「やまぐちっ子の心を育む道徳教育」プロジェクト推進校２年次として、昨年度よりもさらに深く道徳科、道徳教育の研究を進め、確かな成果と感じることができた。まず、道徳教育としては昨年度から取り組んでいる「かつま」っ子カードを中心に据え取組を続けた。２年間「かつま」っ子カードの取組を続けることで、３つのあるべき姿に近づくために、様々な活動から「学び」「生かし」「振り返る」を繰り返しながらよりよい成長をしていく勝間小児童の姿を見て取ることができた。今後はこの「かつま」っ子カードの一連の取組をより継続的な取組になるように工夫改善していき、「勝間小の伝統」という形に昇華させていくことを目指して取り組み続けていきたい。

道徳科についても道徳授業セミナーに向けて、研究を進める中で３つの視点を意識した道徳科の１つの授業スタイルを確立することができた。今後は、この授業スタイルを基本とし、教職員それぞれが独自の工夫を加えながら、さらに効果的な道徳科の授業の在り方を模索していきたい。